

## 『英語教育のための国際英語論 —英語の多様性と国際共通語の視点から—』

柴田美紀・仲潔・藤原康弘 著 (2020)

大修館書店 197 ページ

杉内 光成

早稲田大学本庄高等学院

英語はこれまで社会一般で漠然と「国際共通語」として使用されてきたが、国際共通語に至った歴史的経緯とその背景にある社会的ならびに政治的ねらい、さらに国際社会における英語使用の実情などを理解しなければ、国際共通語としての英語を理解することはできない。本書は、英語を国際共通語という観点から捉え直し、その理解が英語教育にどのような示唆を与えるのかを考察したものである。今日、英語は特定の国や地域の母語話者の言語としてだけでなく、世界各地で多様な背景を持つ人々によって使用されている。本書はこのような英語の広がりや多様性に着目し、英語を国際共通語として理解するための理論的枠組みを提示するとともに、その知見を英語教育の文脈の中でどのように位置づけることができるのかを丁寧に説明している。

まず、英語がどのように世界へ広がり、どのような形で使用されているのかが整理されている。英語の多様性や国際共通語としての役割について説明しながら、従来の「標準英語」中心の英語観を見直す必要性が示されている。続いて、国際共通語としての英語の特徴やコミュニケーションの実態が論じられ、それらを踏まえた英語教育のあり方について考察が加えられている。各章では理論的な説明に加えて、英語教育との関連についても触れられており、英語を取り巻く社会的・言語的状況を理解しながら英語教育を考えることができる構成となっている。内容を概観すると、英語の多様性、国際共通語としての英語の特徴、英語コミュニケーションの実態、そしてそれらを踏まえた英語教育のあり方など、多岐にわたるテーマが扱われている。

特筆すべき点はいくつかあるが、1 つ目は各章の最後に「英語教育への提案」が設けられている点である。英語の多様性や国際共通語としての英語に関する議論は、理論的な説明に終始してしまうことも少なくない。しかし本書では、各章で扱われた内容を踏まえ、英語教育の現場においてどのような示唆が得られるのかが整理されている。そのため、読

者は理論的知見を教育実践と結びつけながら理解することができる。例えば、第4章アクセントと言語態度では、英語母語話者の話す英語にも独特のアクセントを伴った英語が複数あることに言及し、「教室で音声指導を行うにあたって、ネイティブの発音＝「英語」の音韻規則ではないと意識する (p. 65)」ことを提案している。このような考えを知ることによっては、授業を振り返るための視点を得ることができる。

2 つ目は、英語を特別な言語として過度に位置づけることへの警鐘が示されている点である。英語が国際的に使用されている言語であることは疑いないが、本書では英語を数多く存在する言語の一つとして捉える視点の重要性が強調されている。英語のみを特別視する姿勢は、他の言語や文化の価値を見えにくくする可能性がある。本書はこの問題を丁寧

に論じることで、英語教育をより広い言語教育の枠組みの中で捉える必要性を示している。3 つ目は、言語教育と英語によるコミュニケーションの関係について分かりやすく説明している点である。国際社会において英語は、必ずしも母語話者同士のコミュニケーションのためだけに用いられているわけではない。むしろ、異なる言語背景を持つ話者同士が英語を共通語として用いる場面が多く見られる。このような状況を踏まえると、英語教育においては単に標準的な英語を習得することだけでなく、相手との相互理解を重視したコミュニケーション能力を育成することが重要となる。本書はその点を踏まえながら、英語教育の目的と役割について改めて考える必要性を提示している。

本書の終盤では、社会言語学的視点からの英語教育のあり方についても論じられている。英語が多様な社会的背景の中で使用されていることを理解することは、英語教育を考える上で重要である。英語を単なる言語技能として教えるのではなく、社会や文化との関係の中で理解させることが求められるという点は、英語教育にとって重要な示唆を与えるものである。さらに、グローバル社会で活躍する人材に求められる英語力についても言及されている。国際的な場面において必要とされるのは、単に流暢に英語を話す能力だけではなく、多様な文化的背景を持つ人々と協働しながら意思疎通を図る力である。本書はそのような能力を育成するための英語教育の可能性についても考察しており、グローバル化が進む現代社会における英語教育の意義を改めて示している。

英語教育を取り巻く環境が大きく変化する中で、「どのような英語を教えるべきか」「どのような力を育成すべきか」という問いはますます重要になっている。本書は国際共通語としての英語という視点からこれらの問いに向き合い、英語教育を考えるための新たな視点を提示している。私自身も本書を読み、無意識のうちに英語母語話者を規範とする音声指導をしていたのではないかと自身の指導を振り返ることができた。多くの英語教員が本書を手に取り、その議論から示唆を得ることで、自身の授業を見直し、より豊かな英語教育の実践へとつなげていくことが期待される。